

「いじめ」を 考える

「競争に勝ちぬく」教育が

強調される社会で

子どもたちはお互いの成長を

認め合う気持ちを

持てなくなっています。

その中で、大人ができることは何なのか、

これまでの活動の経験を語り合う中で、

解決への取り組みを考えてみませんか。



12・5トラウマにしない

自殺させない

「いじめ」を考える県民集会

どんな子も、必ずかわり成長する。ことを

語り合える職場こそ

さいたま市立東大成小学校 山本 悠子

現場の願いや思いから かけ離れた市教委の対応

ここ数年、さいたま市でも子どもたちに関わる心痛むできごとが続いています。これに対するさいたま市教委の対応は、子どもたちや現場の教職員がおかれている状況や願いとかけ離れています。

自殺やいじめがおこるたびに、「緊急アピール」を全クラスで読み上げることが、半ば強制されています。このアピールの留意点には「読み上げ、説諭し、持ち帰らせ、保護者に必ず渡すよう指導すること」と書かれています。これは、教育内容への介入です。また、アピールには「いじめは警察も許しません」という文言もあり、市教委の姿勢が取り締ま

り主義であることが表れています。

自殺やいじめの問題を考えると、子どもたちの育ち方やなぜ悲しいできごとが起こってしまうかなどの背景をつかむことが最も重要ですが、市教委の姿勢には、この観点がほとんど見られません。

「またアンケート」 子どもたちの感想

次にさいたま市ではたくさんのアンケートが行われている問題があります。

・人間関係プログラムに係わる調査（3～6年 4、11月 20項目）

そもそも「人間関係プログラム」はスキルを教えるだけで、子どもたちのコミュニケーション能力を高めようとするも

ので、子どもたちの実態には全く合っていない。このアンケートの結果を数値化し、「Dゾーン」と称するところに位置する子どもたちと面談することになっています。

・「心と生活のアンケート」（全学年 4、11月 20項目）

『生きていてよかったと思う』の項目に『そんなことはない』と答えた子と『元気度』なるものを数字で表し、『20以下』の子には面談を実施します。

・全国学力テスト「児童質問紙」（6年 4月 86項目 ※全国で行われているものから一部の項目を削除して実施）

・さいたま市学習状況調査「生活や学習に関する調査」（5年 4月 50項目）
・アンケート（5、6年 9月4日 7

項目 ※いじめ・自殺があったために緊急に実施)

これだけ多くのアンケートがたて続けに行われているため、子どもたちは当然のことながら、「またアンケート」というふうにとらえています。記名し、結果によっては望みもしない面談になることを知っていますから、いわゆる「いい答え」を書くことになりません。私のクラスには、心に重い悩みをかかえている子がありますが、その子の回答はすべて「安心して面談の対象になりません。このことから、これらのアンケートが子どもたちの真の悩みや苦しみをつかむことにはなっていないのは明らかです。」

もう一つ、さいたま市では、今年度から「いのちの支え合い」を学ぶ授業を5、6年の全クラスで実施することを決め、実施報告までさせるなど、現場に押しつけてきました。教育内容への介入という点でも大きな問題ですし、内容的にも、友だちとのトラブルが起きたときの解決の方法を、文言まで決めてロールプレイングさせ、「よい解決法」としてとらえさせるなど非常に表面的なものです。実施後の子どもたちの感想は「授業では5分で解決したけど、本当にトラブったと

きはもつとごちゃごちゃする」という内容のものがたくさんありました。

「苦しくなったら 話しやすい人に 話すんだよ」

子どもの状況は厳しく、教職員は待ったなしの対応をせまられることもあります。先日、私の学校であったことですが、6年生の女子が保健室で養護教諭に「Oさんはブログに友だちを攻撃することや先生の悪口を書いている」ということを知らせてくれました。養護教諭は、すぐに担任と同じ学年の私に連絡してくれ、ブログも見ました。ブログには「何度死にたいと思ったことか」「自殺する妄想をしていた」などと書かれていることがわかりました。「これはほうっておけない。すぐに対応しよう」ということになり、担任、私、養護教諭、生徒指導主任、教育相談主任、管理職が参加して小委員会を開き、対応を検討し、方針を決めました。ここで大切にすることは、「ブログを強制的にやめさせるなどの取り締まりになるのでなく、Oさんに心を開いてもらうにはどうするか？」ということ

でした。

そして、次の日にOさんとじっくり話そうということになりました。その日は、就学時健康診断のため、ほとんどの子は2時間で下校し、Oさんは、その手伝いで午後まで残ることになっていて、じっくり話す時間がとれる日程でした。本来はこういう特別な日でなくても、子どもたちとゆつくり、じっくり話す時間がとれる学校でなければならぬと思います。話を聞く相手は、兄弟を担任したこともあり、保護者ともつながりがある私が担当することになりました。Oさんはブログのことをかくしたりせず、正直に話してくれました。

「友だちとけんかしたり、いらいらしたりすると、悪いことだとわかっていてもブログに書きたくなる。」「書いた後、夜寝ていると書かなきゃよかったと思って、自分でも嫌になる。明日はあやまるかなと思うけど、学校に行くとまたいらいらする。」「というようなことを話してくれました。自殺云々のことは自分からは言い出さなかったが、私が話を向けると「あのときは、本当にそんなことを思っていた。」と話してくれました。

その後、母親から「あの頃は家でも手

すりにとびついたりして、様子がおかしかった」という話をしてくれました。ブログの危険性などを話すと、「やめる」と言ってくれましたが、何だか強制的にやめさせたような気がして「今度いらいしたらどうする?」と聞くと、「そのときにならないとわからない。」という答えでした。「もう、絶対しない」などという答えより、本音が表れていると思います、彼女を信じて、「苦しくなったら、話しやすい人に話すんだよ。」ということ伝えて、その場の話は終わりにしました。彼女は、その日のうちにブログを退会しました。

2学期末の書写の時間に今年を表す感じを書いたところ、Oさんは「笑」という字を書いたということを担任から聞いて、養護教諭といっしょにほっとするとともに、とてもうれしくなりました。

本当の意味でほめる

今、子どもたちは、いつも競争させられ、友だちの目を気にし、はりつめた生き苦しいような状況の中で生きています。さいたま市は、「授業日数205日以上」が今年度から本格的に実施されま

した。6時間の日が減ったり、長期休業の前の短縮日課が増えたりするのかという若干の期待もありましたが、そんなことは全くありません。振替休業日のない土曜授業が年1回以上、夏休み・冬休みの短縮、開校記念日の授業実施で、以前にもまして子どもたちも教職員もゆとりがなくなりました。

子どもたちは、本当の意味でほめられ、認められたいということが、あまりありません。ほめるといっても「あいさつができた」とか「靴のかかどがそろっていた」とか「成績がよかった」ということでは、子どもの心に響かないと思います。私は、他の人のことを気にかけた時、と、筋の通った意見を言った時、にほめることにしています。

「今日、Aさんが休みだけど、どうしたんだろう?」「学級レクでドッジボールするけど、骨折しているBさんができるとは何だろう?」「土曜日が学校だったら、月曜日は休みにしてほしい。」「1年生より10人以上人数が多い俺たちの教室の広さを1・5倍にしてほしい。」などです。教職員にゆとりがあれば、ほめることはもっともつと見つかるとは思いません。

教職員を応援し、支える施策を

市教委の対応に疑問を感じながらも、教職員は目の前の子どもたちの苦しみや願いをつかみ、子どもたちがのびのびと成長できることを願って、超多忙の中でも頑張っています。行政は、「先生方の努力に感謝する」とか「子どもたちのために」というかけ声だけでなく、30人学級の実現や多忙化の原因になっている研究委嘱の見直しなど、本当の意味で教職員を応援し、支える施策をすぐ実行してほしいものです。

悩みを出し合いながら、どんな子ども、必ずかわり成長することを語り合える職場が私たちを元気にしてくれます。どの子ども笑顔で過ごせるような、「子どもたちのいのちを守り、人間として大切にされる学校」(全教アピール)を創るよう、仲間といっしょに頑張りたいと思います。

(12/5「いじめ」を考える県民集会での報告要旨)

子どもの語りを大事に

生徒が取り組んだ「いじめ」問題

草加市立新田中学校 岡田 祥志

「声をあげる」とは

「いじめ」は、人権侵害です。人権侵害に対する取り組みであると思っています。

人権侵害を受けている生徒たちがどうやって声をあげて取り組んできたかという事です。大人でもたいへんな取り組みなのに、それを子ども自身に要求していくわけで、考えてくれただけでもとても大事なことで、ましてや少しでも声をあげてくれたことは、ほんとうにノーベル賞をあげてもいいくらいなんだというくらい、子どもがやるっていうことはそういうことなんだと思っています。その三つの報告をします。

スタートはいじめをなくす決議

一つ目が、「いじめ、いやがらせをなくすための決議」を行ったことです。これは中学1年生の時に決めました。4月、1年生は、特に一学期は様々、いろんなトラブルを起こすのですが、それは多くは小学校からの延長で引き続きやっていることが多いものです。だから1年生の一学期の段階でこのことについて取り組むことはとても大事なことで思っています。そこでなにが起こっているかをつかむことにもなるし、そのことについて中学校の先生に、子どもたちがどのような問題を抱えているかをわかってもらえる、学んでもらえることにもなります。

す。この実施は中1の一学期になります。2・3年になると深刻になると決議の取り組みだけでは解決になりません。

取り組みに当たって、配慮しなくてはいけないことがあります。一つは1年生になつての時期が大事なことで、二つには、これですべてが解決するわけではないということです。個々で起こっている問題は個々に対応する必要がありますが、決めたからといって子どもですから、大人でもそうですが、実行できるかそれはまた別問題です。よくある問題ですが、「おまえたちなぜ守らないんだ」と「これはいけないことなのだ」とせめることは、よくない指導です。そのようなことにも配慮しながら、どのように取り組んできたのかということ報告します。

いじめの「定義」を生徒が

いじめを誰がどのように定義するかはとても大切です。大人が定義するのではなく生徒自身が話し合って定義をするということが大切だと考えています。なぜならその話し合ったことが、その後の展開に繋がってゆくからです。

いじめを先生に言うことをよく「チクル」と言って生徒は否定的にとらえますが、このように決議をすることで、それは「チクル」ことではなく、「自分たちで決めたことをまもること」なんだととらえ直しができるようになり、少しでも話しやすくなるのではないかを考えています。

定義は学級委員会を使って話し合いを行なって案を作りました。その案をクラスに提案し意見を求め、最終的には学年集会を開きそこで決議しました。案作りの時には学級委員に何が嫌なのかを具体的に聞き、そのことを案の中に入れました。

「殴る 蹴る 壁に押しつける みんなで上にのる 体の特徴をからかう言葉を使う など」この話し合いを行なうことで学年の実態が見えてくるようになってきます。またそのことを生徒達がどのように考えているかがわかってきます。なかなか「やめて」と声にすることはできないが、決してそのことをいいとは思っていないということがわかってきます。そうすると次に取り組まなければならないのは、そういった思いを声にしてみんなの前に明らかにする取り組みで

す。そのためにその集会を利用しました。

「いじめ・いやがらせをなくすために決議」にあからさまに反対する生徒はいません。でも積極的みんなの前で賛成意見を発表してくれる生徒もいません。もしそんな生徒がいたらその生徒はリーダーの素質があります。今は待っていてもリーダーは出てきませんから意図的に育ててゆく必要があります。この取り組みをその機会としました。クラスに案を提案し意見を求めたときに、その用紙に次の項目を入れました。「賛成意見を集会で発言してもいいですか。」「自分で発言をするのはできないけれども、あなたの意見を代読するのはいいですか。」この項目に○をつけた生徒は、リーダーになる要素があります。その生徒にこちらが個別に働きかけをしました。集会では学級委員も含めて十数人の生徒が発言してくれました。

決議をすることで取り組みの基準みたいなものができました。その基準に照らし合わせて学年の中に起っていることを考えます。決議したもののその後もさまざまなトラブルが起きました。中学生にとっては、決めたこととそれを守ることはまた別問題なのです。

決議違反に対しては、全ての問題を学年の前に明らかにして取り組みののではなく、全体の問題にするものと個々に対応するものを分けて取り組みました。また学年が上がるにつれて問題も深刻になってきます。それは起こす側に深い問題があるからです。そこに切り込まない限り、決議をしたからと言って解決できるものではありません。そのことも了解しながら取り組みを進めました。

いじめ問題で生徒自身が声をあげる。それは本当に勇気のいることなのです。ですからこのような形で声を上げてきたこの中学生達はすごいと思います。これが一つの取り組みです。

いじめについて 語り「劇」にする

二つ目の取り組みは、いじめには周期があるようです。いじめって、今も昔も、いつもあるのです。いまそれらを思うに、前にどう取り上げたかということが大きいと思うのです。そのなかで、いまから十年ぐらい前の取り組みを報告します。それは、当事者に「いじめのこと」を語らせたということです。語らせるとい

ことが大事なのではないかなと思います。いじめられたことを語りなさいと言ったところで、自分がいじめられていることを語りなさいって言ったって絶対語りません。でも、自分がいじめていたというのを語ることができたならばその子は、やってきたことをきちっと見詰め直すことができると思っています。本当の意味で語り始めたら、そこを乗り越えたところであるでしょう。

そういうことできないかと思っていたとき、文化祭の取り組みがありそれを利用しました。そういうときこそクラスが盛り上がりつつある時で、いじめのピークが重なってもいました。文化祭の中で、いじめをテーマにした劇をやるということにしました。脚本は既成のものを使うということではなく、いま起こっているのだから自分たちのことでテーマにしてやったらという話しになり、その脚本作りをやりました。そこでいじめを語る会をクラスで話し合っただけという話で話し合いました。それを脚本にするために考える中心の子たちを集まってもらって話し合いをやりました。どんなことを経験したのということを話してもらいました。

決してリーダー的な子でない子も参加していました。女の子がいて、この子はあつげちゃんなんでも話す子です。その子が、いまの中学校のことなので話しづらいので、別にいままでということでも語ってもらって、自分が嫌だったことをぼつぼつ話し始めました。

2年生の時、自然教室というのがあり、そこで実行委員だった子、リーダー的な存在で頑張っていた子で、その子が、「先生、私、2年生の時、手を切りそうになりました。」と言い始めました。「どうしてなの。」って。「自然教室の時、リーダーとなったのでみんなの先頭に立つわけ、先頭に立つといろいろと指示を出すわけです。そうすると、なんかいい子ぶっているんじゃないのって言われたんです。言われ始めたんです。」気にはしていなかったんだというのですが、だんだん気になるようになってきて実行委員であることが辛くなって、カッターナイフを手に取りました。でも切らなかったんです。「それじゃ、どうして切らなかったの。」と。「その時に親の顔が浮かんだ。」と言ってました。「わたしは、切ったら親はどうなった。」と。「そこで踏みとどまった。」と言いました。私はすぐに

「気付かなくてごめんね」って、「よくとどまってくれた」と話しました。「よく話してくれた」と言いました。

そうしたら、つぎに今度は男の子が、「先生。ほくね。あつ、ほくじゃなくて、おれやめたんだ。」「なに、やめたんだ。」って言ったら、「ひとを殴ることをやめたんだ。」って言いました。そしたら、周りの子も「最近、こいつね、もう殴らなくなったんだよ。」って言うんです。今までさんざん暴力をあちこちやっていました。「えっ。なんで。」3年になったある時に「3年になったんだ。もうこれからは、殴らないんだって決意をしたんだ。」そしたら、早速、今度はその話を聞きつけた奴がいて、そいつを呼び出して、こいつはなぐらないっていうことがわかったで、こいつはさんざん殴られたそうです。でも決意をしていたから、決してその時には反抗しなかったんだそうです。そうやって殴られながら、しみじみ思ったんだそうです。「おれが殴っていたときに殴られた奴はこんなふうになっていたのか。それがわかった。先生。」「えらかったな。○○」「こいつ。いまはやらないんだよ。」「そうなのか。そういう形で乗り越えてきたのか。」と。

その二つを直接シナリオにするわけに
いかなないので、はじめ前半であるクラス
でいじめの問題が起こることをやり場面
チェンジをして「みなさん。いじめの問
題をどう考えますか。ぼくたちは、こう
考えます。」って、何人かの子たちが客
席にむかって訴えるっていう劇をやりま
した。

道徳の授業で

三つ目の取り組みは、道徳の授業です。
これは、佐世保で起きたある子どもの刺
殺事件をどう考えるのか、という授業で
す。その時に、当地ではさまざまな取り
組みを行っていた、それにも関わらずあ
の出来事が起こったということです。あ
る弁護士が、道徳の資料の中に語り合
うことが大事だと書いてあり、この語り合
うということをやったこと、この語り
合うということを道徳の授業の中でや
りました。

実際の事件について、どう思ったの
かを書いて語らせました。なにを語ら
せたかという、「君たちもそのような
相手を実際に殺したくなるなんてあるも
の?」と問いかけをしました。そうした

ら、「ある」という回答で、「ない」とい
う子はいませんでした。「じゃ、それは
どんなときなの?」と問いかけました。
「なんか、むしゃくしゃするときに」、自分
のそういう気持ちになるときの様子を聞
きました。「そういういららする気持
ちのときってあるの?」。グループ、班
をつくり、話し合いをさせました。これ
については、いっぱいはなしあい、中学
生はそういったことはたくさん抱えてい
ます。それから、「いろいろでた話しを
だして」っていうことで、話してもらい
ました。「そういうのってあるよね。」つ
て、「でも君たちはやらないよね。」そし
て、「君たちとその学校で起きたことと
の違いはなんだったんだろう」と。「君
たち、中2なので小学校6年生とは少し
先輩なのだから、じゃ、どうすればよか
ったんだろうか?」アドバイス、手紙を書
いてみなさい。」ということ、アドバ
イス、手紙を書かせました。そこで印象
に残っているのは二人います。一つは、
ぼくもそうなるときがある。でも、ぼ
くはそうはならない。なぜならば、ぼく
は友だち関係をつくってきた。その関係
がだめになったときもある。でも、そこ
でこの子との関係はだめだったかも知れ

ないけど、こうやってつくってきた関係
があるのでこの子ではだめかも知れない
けど、こっちの子でつくることができる
かも知れないから、そういう関係にする。
だから、友達関係もこっちでだめになっ
たかも知れないけど、これですべてでは
ない。こっちを頼りにすればいいんじや
ないの。

もう一人は、教室にいけなくて相談室
にずっと通っていた子が、こんなふう
に書きました。

わたしは教室に行けなかったことがあ
る。あることをめぐって、嫌なことがあ
って保健室に逃げ込みました。その時に
クラスの子たちが何度も何度も来てくれ
ました。そういうふうに関係が、人との
関係が、人との関係がちょっといいの
かな、もっているのがいいのかなと思っ
て、一歩を踏み出してみました。

子ども達の考える力、悟る力、関係
をつくる力を信頼し、引き出す取り組
みがなにより大切ではないでしょうか。

(12/5 「いじめ」を考える県民集会
の報告要旨)

仲間と一緒に活動する中で

川口特別支援学校 山田 厚子

川口特別支援学校高等部で学ぶ生徒たちには、地域の特別支援学級や通常学級から入学してくる生徒たちが半数以上います。彼らの多くは、それまでの学校生活の中で、「いじめ」を体験し何らかの傷を負っています。ちよつと変わった行動をしたり、言ったり、勉強が分からない、等の理由から教室にいられなくなつて保健室登校をしたり、不登校になつていたという生徒も複数います。

入学後、授業の中で、なぜ、この学校にきたのか？、ここでどんな勉強をしたいか？と問うと、「ここしかはいれなかった」、「先生に勧められて」、「友だちが欲しい」、「計算ができるようになりたい」、「等と答えます。そんな彼らも、クラスの中では、小学部から学んできた仲間に対して、自分とはちがう存在」というような目で見たり、なかなか近づけない生徒もいます。中には、自分は来たくてきたんじゃない、と学校にも集団

にもなじめず、不登校になつてしまふ生徒もいます。

自分をみつめる

川口特別支援学校では、発達課題別に学習グループを組み、障害が軽度の生徒たちは教科学習の他に「平和学習」や「性と生の学習」に取り組んでいます。この中で「障害について」や「自分史づくり」等の学習を通して、自分をみつめる時間を設けます。苦い過去をふりかえり、自分の苦しさやわからなさに向き合い、支えてくれた家族の存在にも気づきます。(近頃は、この家族の支えがとても弱くなっている)一緒に学習する仲間も似たような体験をしていることを知り、自分だけじゃないんだ、との思いを実感するようです。

今の自分でいいんだ

また、地域の高校5校との交流会(ふ

れ合い交流会)の場でも、実行委員になつて他校生と一緒に太鼓を叩いたり踊ったり、共同アピールを作る中で、自分の過去・現在・未来を友だちと一緒に語り「今の自分でいいんだ」と自信を取りもどす生徒も多数います。そして、彼らは今までの学校生活では経験してこなかっただろう様々な実行委員(宿泊委員、林間実行委員、入学式実行委員、卒業式実行委員)に立候補し、仲間と一緒に考え作り上げ、十分な練習を経てみんなの前に立つ経験を積みまふ。

生徒主体の取り組みを

高等部の3年間を通して、仲間と一緒に活動する楽しさを経験し、周りの仲間の存在に目を向けられるようになり、障害の重い仲間に対してもできることや頑張っている姿を認められるようになり、ひとまわり大きくなつて卒業していきまふ。私たち教員も彼らの持つていける力が発揮できるよう、様々な場面で生徒主体の取り組みをどれだけ準備できるか、学校として問われているのではないかと思います。

(12/5「いじめ」を考える県民集会での発言要旨)

子どもたちの心の声に

耳をすますゆとりをもつと

藤市 小学校保護者 太田 直子

いじめ問題に関わって

この2年間、小学校の保護者としていくつかのいじめの問題に関わってきました。

被害を受けたお子さんの母親から、青あざがつくまで殴られたなど、実際のいじめについて聞いたこともありまし。そのお母さんは、家でたまたま机の上においてあった小6の娘の連絡ノートをめくったところ、娘が先生に被害を訴えていたことを知ったのです。クラスの10人を越える生徒から言葉や身体的暴力のいじめをうけ始めてすでに数ヶ月が過ぎた頃でした。

驚いた母親が本人に話をきくと「心配をかけると思って言えなかった」と言っ。たそうです。どんなにかつらかったこと。でしょう。母親もそのことを話してくれ。たとき、涙で声が震えていました。

自分の子どもがされたことを考えると腸がにくりかえり、とても冷静ではい。られない。でも、相手も成長過程の子ど。もだし、きちんと自分のしたことをみつ。め、謝罪し、あらためてほしい。爆発し。そうになる思いを何とか抑えて、その母。親は学校に通い、何度も担任や管理職と。の話し合いをもち、いじめた本人や保護。者とも面接をして、娘が納得のいくまで。話し合いを続けました。とにかく娘の思。いに寄り添って動いたのです。

私は、親の立場としては当然ですし、それでよかつたのだと思います。結果が。満足いくものだったかどうかは別とし。て、いじめの発覚以来、不登校が続いて。いた娘さんは卒業式にも出て、地元の中。学に元気に通っています。

ちよつとした連絡ミスが 学校不信に

このとき、私が母親の話をきくなかで感じたことがいくつかあります。

一つ目は、ちよつとした連絡ミスが学。校不信につながってしまうということ。親は子どもがそこまでやられて必死なわ。けですが、それを受けとめる学校の側の。認識が甘いというか、何もないときなら。うっかりしてすみません、ですむところ。がそうはいかなくなっているということ。を、もつと考えて欲しかったなと思いま。す。

二つ目は、一つ目とも関連するのです。が、学校の側に、本人の全的な味方に。なってくれる人がいなかったというこ。と。学校としては、加害者も生徒で人権。を守らなければいけないということ。で、ある意味、仕方のないことなのでしょう。が、母親はそのあたりに不満を感じてい。ました。少なくとも誰か一人、学校の中。に本人と保護者の思いを全面的にうけと。め、寄り添う役まわりの人がいたら、も。う少しスムーズにことが運んだのでは、。と思いました。

三つ目、これがすべてにかかわることなのですが、先生たちに子どもの心に耳をすます余裕を持つてほしい、ということ。娘さんはいじめの被害を訴える中で「先生もみていた」と言っていました。もしかするとそう思っただけなのかもしれないし、先生は見えていたけれど、遊びの延長だと軽く受けとめてしまったのかもしれない。本当のところはわかりませんが、授業中や休み時間の子どものたちの様子から、彼らの心の声を聞き取ろうとする姿勢を、先生方には忘れないでほしいのです。

先生たちに本来の仕事ができる時間を

小学校高学年にもなると、子どもは親にいないことがたくさん出てきます。日中の大半の時間を一緒に過ごす大人として、親にかわってちょっとした子どもの表情を読み取る努力をしてほしい。でも、それには先生たちがいくらがんばっても限界があります。先生自身も時間的、精神的なゆとりがなければ、そんな風に子どもに向かうことはできません。ですから、先生たちがつと本来の、

子どもを教え、育てる業務にきちんと時間をさけるような体制をつくっていくことが、廻り道のように見えても、いじめの芽を摘む一番の近道ではないかと思います。いくらいじめをやめましようというスローガンをたてても、子ども同士の関係に切り込んだり、傷ついた子どもの心によりそったりすることのできる大人がいなければ、その場で子どもの命を救うことはできません。

クラスみんなで楽しむ時間を仲間と

最後に一つ加えたいのは、クラス全員をまきこんで楽しむ集団遊びをぜひ、やってほしい。すばしっこい子ども、のりい子ども、強い子ども弱い子どもいろいろいて、でもみんなでやるんだ、ということに先生にはぜひこだわりの持つてほしいと思います。

別に遊びでなくてもいい、クラスみんなできとくむ何かを大事にしてほしいということ。いじめなんてはずかしいことだ、という雰囲気、みんな楽しいクラスの仲間になることでふきとばして

ほしいと思います。

いじめは駄目！ではなくていじめを超える、忘れる価値観をつけていくという発想です。これは社会に出てはできない、学校にいる間にぜひ、子どもたちいろいろな場面で体験させたいことですね。

(12/5「いじめ」を考える県民集会での発言要旨)



「見えにくいいじめ」について

考える

千葉大学 片岡洋子

いじめが一因となったと見られる子どもの自死が社会問題となっている。そうした事件の報道では、周囲はいじめではなく遊び仲間のふざけと見ていたと伝えられ、自死に至るまでの苦しみになぜ気づかなかつたのかと疑問の声が上がる。

いじめが起こっていても親しい遊び仲間と見えてしまう、それはなぜなのだろう。ここでは、被害者と加害者と傍観者が誰なのか見えるようないじめではなく、遊び仲間として被害者を抱え込んで周囲にいじめとは見えにくい問題について考えてみる。

親しい関係と暴力

いじめとは全く別問題のように思われるかもしれないが、いじめで遊ぶ子どもたちの関係には、恋人間の暴力＝デート

DVと似た「暴力的な親密さ」がつくられるのではないかと考えてみたい。

中学生や高校生も含め、若者の恋愛関係にはデートDVの危険性がつきまとう。「つきあい」が始まると、友だちづきあいとは異なる親密性をつくろうとする。その際、友だち関係なら遠慮が働くようなことを要求するようになっていく場合がある。例えば、値の張るモノを「おねだり」する、「おまえ」呼ばわりなどぞんざいに扱う、勉強や友だちづきあいよりも自分との関係を優先させ行動の自由を奪う、相手の携帯電話のアドレスやメールをチェックする、常にごで誰と何をしているかメールで知らせるよう要求し監視する、等々である。

そうした行為が恋愛関係の証であるかのようにみなされ、身体的暴力を伴わなくても他者をコントロールする精神的暴

力となる。しかし当事者はそれを暴力による支配とは思わない。他の人との関係にはない親密さと思い込む。自分の苦痛より、相手との関係を維持することに神経を使う。「別れた方がいい」と周囲が言っても、当事者は相手を失うことを恐れる。

デートDVが暴力だと当事者に気づかれにくいのは、好意の表れによるものと見るからだ。「好きだから」という言い訳が暴力と気づきにくくさせる。それと同じように、一緒にいる仲間うちで、「おれら友だちだろ」と言いながら「おごれよ」「貸してよ」という要求がやがて命令になり、少々乱暴に見える遊びの延長での「いじり」をエスカレートさせ、抵抗する力を奪い忠誠させる。そしておそらくDVと同じように、嫌なことばかりではなく、ときどき優しくされたり、ほめられたりするという「ご褒美」があるだろう。その「ご褒美」がもらえるようにうまくやれない自分を責めて、抵抗力をいっそう奪われてしまうのではないか。

子どもを虐待する親はそれを「しつけ」と、体罰やしごきをする教師はそれを「指導」と、心底信じている。DV加害者は

「愛しているから」だとパートナーを暴力で支配する。そして遊び仲間をいじめている子どもたちは「楽しい」「遊びだよ」と言うだろう。

「いじり」と「いじめ」

私が担当している「いじめ・不登校と子ども理解」の授業（千葉大学教育学部）で受講生が書いてくれた体験談から「いじり」の当事者たちの声を拾ってみよう。

〈中・高でよくあったのは、あくまで「いじり」だと思って本人達はやっているのだが、一線をこえて、「いじめ」になっていると思われることをその子にするというものである。例えば、何人かで一人の服を教室など人目のあるところで脱がせたり（これには私も参加していた）、テープでぐるぐる巻きに手をしばってペランダに監禁したり（これにも私は参加していた…）、振り子の要領で投げ飛ばしたり（これにも…）といった具合である。今考えると明らかにいじめだと思う。非常に反省している。しかし、当時は面白半分でやっていた。そして、そんなにひどいことをしているとも思わなかった。また、そのことで、友人関係が壊

れるということもなく、普通に仲良くしていた。〉

みんなが見ている前で「服を脱がせる」、「テープでぐるぐる巻きに手をしばってペランダに監禁」、「振り子の要領で投げ飛ばす」、これらの行為は明らかに暴力である。しかし友人同士の面白半分の遊びだと思ってやっている方には暴力をふるっているという自覚はない。

次は「いじられていた」という学生の声である。

〈小・中学校時代、私はいじられ役で、授業・休み時間関係なくいじられていました。自分でもそのキャラクターは認識していましたし、トータルでみれば楽しい学校生活でした。担任の先生も、小学生のときに一度クラスの男子に注意したことはありましたが、中学生のときは注意することなかったで、先生たちは「いじり」という認識をしていたのだと思います。ただ、その中でも嫌だなと感じることはあり、露骨に態度に出しているときもありました。最も記憶に残っているのは、中学生の時の文化祭で、勝手に好きな子に告白されたことでした。先生はこの事実を知らないで、何もあり

ませんでした。普段は「いじり」であっても、ときに「いじめ」である場合もあり、またそのことに限って先生が把握できないこともあると思います。〉

この学生は、いわゆる「いじられキャラ」だと自分を認識していたと言う。そして教師も「いじり」という遊びでつながっているという理解でしかなかった。しかし時々「いじめ」が入り込んでいた。「苦痛」かどうかと言われれば、我慢できる程度だったのだろうが、嫌だと思ふことがあった。その嫌だという気持ちを大切にしたい、抜け出すことに正当性があると教えていく必要がある。先に述べたように、いじめに特化するのではなく、虐待、DV、体罰など親しい関係で起こる暴力についての学習が有効なのではないだろうか。

友だち関係の苦しさを 受けとめる「誰か」を

いじめ被害の経験を持つ学生の多くは、いじめられていることを親にはなかなか言えなかったと言う。親が落ち込む、悲しむと親の気持ちを気遣ってしまうこ

とが多い。親に助けを求めたが、受けとめてもらえなかった学生もいる。

「私がいじめられていた頃、親に軽く「時々からかわれちゃうんだよね」と言ったことがあったのですが、「そんな奴らに負けてちゃダメだよ！やられたら3倍やり返してこい！」と言われました。そのことが良いのか悪いのかはともかく「それができたら苦労しない」と思っていたことを何となく思い出しました。結局、親に言っても解決しない。自分ではどうにかしなきゃ、と思い、辛くても学校に行っているうちにいじめはなくなっただので、結果オーライではありますが、その時、「辛かったら休んでもいいんだよ」と言ってもらえた上で学校に通っていたら、もう少し違う心境でいられたのではないだろうか、今になっては思います。」

一方、親が「味方だよ」と言ってくれたことを支えに乗り切ったという学生もいる。

「転校生だった小学3年生の時、軽いいじめを受けました。仲間はずれにされて休み時間は独りで寂しい思いをしました。『自分の何がいけないんだろう』『リ

ーダー格の子の顔色をうかがわなきゃダメなんだ』とたくさん悩み、自分の友人関係の築けなさに落ち込むばかりでした。しかし、そんなとき、両親が「あなたの味方だよ」と辛いときにそばにいてくれたおかげで、毎日どんなに辛くても学校に行くことができ、「自分は自分らしくいればいい」と自己肯定感を高めることができました。」

親が必ずしも受けとめてはくれない。友だちでもきょうだいでもいい。受けとめてくれる「誰か」がいればいい。その「誰か」になる、あるいは「誰か」とつなげる人が必要だ。何より教師にその役割が期待されている。

アレルギーをきっかけに深刻ないじめにあった子どもの例を聞いて以下の体験を書いてくれた男子学生がいる。

「私もアレルギーがあります。：小学校時代は6年間お弁当、中学時代は給食をベースとしながら食べられないものを持っていていました。：担任の先生は、学年が始まる一番最初に私と親と相談しながら、全員に話をしました。その甲斐あって、嫌な思いをしたことはほとんど

ありませんでした。友だちに恵まれていましたし、先生が私の知らないところで動いてくれたのかもしれない。ただ一度だけ、友だちに「(給食の)俺のパンの方がおいしいよ」と言われ、泣き出してしまったことがあり、指導が入りました。「もしかしたら嫌な思いを今までもしていたかもしれない」と先生が言ってくれたことを覚えています。子どもにとって大切なこと何？どうすればよいの？と常に周りの人と考え続ける姿勢が、何よりも大切なのではないかと思います。」

みんなと同じことができないことが「いじめられやすさ」につながると考えた教師は、子どもたちに事情を理解させ安心して過ごせる環境づくりを行った。この学生は泣き出して、「いやだ」という気持ちを表現し教師に受けとめられ、安心を取り戻している。親しい関係に安心が得られないとき、誰かに助けられた体験の積み重ねが、助けを求めているいじめを助長させないことにつながるだろう。いじめは起こる。だから深刻化する前にブレイキがかかる条件を整えておきたい。